

横山ゆずり作「君死なすまし」

<前編>

(効果音) (ゲームの電子音)

大原わたる えい! よーし、来た来た来た、行け! …あ、チクショー、やられた。こいつ…

(効果音) (ゲームのピコピコ音)

わたる あ、あと3機しかない。クソ! これじゃ負けるじゃんか。ほら、撃ち落とせ。…やった! あとはミサイル空母だ。

祖母タキ子 何だい、わたる。さっきから勇ましいねえ。一体何のゲームだい?

わたる (早口で)「ジ・エンド・オブ・センチュリー・ミラクル・スペース・バトルロイヤル」ってやつ。

タキ子 え、ミラク? 何だい、ソノ「ミラク何とか」って?

わたる だからあ、(今度はゆっくり目に)「ジ・エンド・オブ・センチュリー・ミラクル・スペース・バトルロイヤル」っていうゲーム。簡単に言うと、宇宙戦争に生き残るっていうやつなんだ。…あ、来た! それ突撃だ! これで死ねー! やった、皆殺しだ。…ほら、おばあちゃん、この赤いのが消えたら敵が死んだってこと。全部死ぬと、玉砕マークが出るんだ。

タキ子 玉砕マーク…。(ため息)何だか物騒なゲームだねえ。わたるは、こういうのが面白いのかい?

わたる うん、これ、本当に面白いよ。前からはやってて、欲しかったんだけど、この間おばあちゃんがお小遣いくれたでしょ。それで買えたんだよ。感謝してるって。

タキ子 おやおや、せっかくお小遣いあげても、こんな人殺しゲームに化けちゃうんじゃあ、ちょっと考えちゃうねえ。

わたる ちょ、ちょっと待ってよ。別にこれは“ゲーム”なんだからさ、“ゲーム”。お小遣いストップなんて言わないでよ。

タキ子 ゲーム…。ソウ、お前たちにとっては、戦争なんてゲームの中だけのものかもしれないねえ。だけどね、わたる…。そうだ、ちょっとおいで。こんなゲームよりすごい本物を見せてあげるから。

タキ子ナレーション 私は、大原タキ子と申します。今年で満72になりました。お陰さまで子供たちも一人前になり、気楽な隠居暮らしをさせてもらってますが、年のせいでしょうか、このところしきりに若い自分のことが思い出されてなりません。若いころと言っても、それこそ物心ついてから二十歳^{はたち}の時まで、日本はずっと戦争をしておりましたから、記憶の中に、華やかなものは何もございません。不思議なものでございますね。あの忌まわしい戦争に敗れてからの2、30年、夢中で生きていた時は、あの戦争を忘れよう、忘れようとしてまいりました。けれどこうして

52年がたった今、薄れ掛けた記憶を手繰り寄せ、呼び覚まそうとしている自分に気づき、時折ハッといたします。ことに孫のわたるのような若い者を見ると、“あの戦争のことをしっかり伝えなくては安心して死ねない”と、そんな思いさえいたします。

- (効果音) (ガチャ、ギギーッと重い戸を開ける音。)
- わたる うわあ、ここちのお蔵に入るの、久しぶりだなあ。なんかカビ臭いよ、おばあちゃん。
- タキ子 そりゃ、おばあちゃんだって、めったに入らないからねえ。
- わたる おじいちゃんのお葬式以来かなあ。…それで、何？ 見せてくれるものって。
- タキ子 ちょっと待っておいで。(効果音)(ガサガサ物を探す) ああ、あった、これこれ。
- わたる うわ、何これ？ ポロポロじゃん。
- タキ子 これはね、昔おばあちゃんが学校に勤めていた時の道具だよ。
- わたる へえ、おばあちゃんが先生だったなんて、おれ初めて聞いたよ。
- タキ子 これが教科書。こっちは生徒のつづり方とお習字、それからこれは…。(FO)
- ナレーション 私が勤めておりましたのは、地元の小さな分教場でした。時局の変化に伴い、それまでの小学校が“国民学校”と改められて間もなくのころでございました。数え年で19でしたから、今の高校生と同じくらい。もちろん結婚前のことです。なぜそんなに若くして、と思われるかもしれませんが、何しろ当時は、男たちは皆、兵隊へと取られていきましたから、女史の若い教職者はかなり多かったように思います。そんな仲間たちとともに、私も使命感に燃えて教壇に立っておりました。今思えば、何という使命感だったのでしょうか。“国のために、あたら若き命を捨てよ”と教えるとは…。
- (効果音) (回想。どこかの教室から、オルガンに合わせて歌う子供たちの声「兵隊」の歌。)
- 岡野(旧姓)タキ子 それでは、算数の教科書を出して。第3課の1からですね。では佐々木秀子さん、読んでちょうだい。
- 佐々木秀子 はい! 「1隻の軍艦に、大砲が7つずつあります。7隻分を合わせると、大砲は幾つになるでしょう。」
- タキ子 はい、分かった人。
- 生徒たち (口々に大勢で) はい、はい、はい…。
- タキ子 それでは、弘子さん。
- 弘子 はい、49です。
- タキ子 はい、正解です。では次、和夫君、読んで。
- 和夫 はい。「勇君は慰問袋に入れる物の目方を量っています。1冊200グラムの雑誌を3冊入れると、重さは…(FO)
- ナレーション あこのころの国民学校の教育は、いいえ、すべて“教育”と名のつくものは、戦場

に連なっていました。特に算数、終身、国語、歴史、地理などの“国民科”と言われた科目は、最も重視されておりました。そこでは“天皇陛下のために命を落とすことこそ、最も美しく正しい生き方である”と教えられていたのです。そしてそれは、教室での教科の学びにとどまりませんでした。

男先生 (屋外で朝礼) 整列! 気をつけ! 宮城に向かって敬礼! 直れ! えー、本日の勤労作業は、“縄”の作成を行う。これもお国のための大切なご奉仕だ。皆、心をこめて一生懸命に作るように。皆でたくさん作って、アメリカまで届かせて、ルーズベルトを縛り上げるのだ。いいな!

生徒たち (歓声) わあー!

ナレーション 一事が万事、この調子でした。まだ右も左も分からぬ新米教師だった私は、大切な天皇陛下の赤子をお育てするのだと思うと、身の引き締まる思いでした。

生徒たち (声をそろえて教科書を読む) 「ヘイタイサン、ススメ、ススメ。チテチテ、タ。トタテテ、タテ、タ。」

タキ子 はい、それでは省吾君。一人で読んでごらんなさい。

省吾 はい。)(「ヘイタイサン、ススメ、ススメ。チテチテ、タ。トタテテ、タテ、タ。」

タキ子 はい、上手に読めましたね。では皆さん、この兵隊さんは、何をしているのですか?

生徒たち (我先に) はい、はい、はい…。

信夫 はい、お国を守って、一生懸命戦っていらっしやいます。

タキ子 では、その戦いは何のためでしょう。

生徒たち (我先に) はい、はい、はい…。

タキ子 はい、敦代さん。

敦代 はい、大東亜共栄圏の建設のためです。

タキ子 そうですね。皆さんのうちでも、お父様やお兄様が兵隊さんに行かれた人もいるでしょう。それは大変立派な、名誉あることなのですよ。この中で、大きくなったら兵隊さんになって、お国と天皇陛下のために、お役に立ちたい人!

生徒たち (全員声をそろえて) はーい!

タキ子 では皆さん。今のその気持ちを大切に、忘れないよう、つづり方に書いておきましょう。

(効果音) (職員室のガヤ。戸の開閉ガラガラ)

先生たち (口々に) お疲れ様でした。お疲れ様でした。

林田先生 岡野先生。この前の、先生の組のつづり方、読ませてもらいましたよ。2年生にしては、皆しっかりした文章が書けていますね。

タキ子 ありがとうございます。いつも林田先生が適切なお助言を下さるので、何とか指導の要領がつかめてきたんです。先生のお陰です。

林田先生 いや、そんなことはない。先生の熱心な指導の成果ですよ。しかし…。

タキ子 何か？

林田先生 いや、内容ですがね。こうも一様に「将来は兵隊さんになってお国のために…」と書かれると、痛々しいと言うか、つらいと言うか…。

タキ子 はあ、私は頼もしいと思って読みましたが。

林田先生 うーむ。(ため息)僕なんかは、この村田浩司みたいなのに、心引かれるなあ。(作文を広げて読み始める。)
「今日は、卵ご飯だよ」とお母様がおっしゃいました。僕は本当は白いご飯のほうが好きだけれど、お母様に悪いので、すごいや、と喜んで食べました。この次は、お赤飯を作ってあげるから、と言われました。たまには色のついていないご飯を食べてみたいです。」—どうです？

タキ子 (笑って)浩司君らしいです。確かにかわいそうだわ。育ち盛りなのに。トウモロコシの粉を混ぜて黄色くなった“卵ご飯”や、赤いコウリヤンを混ぜた“お赤飯”ではね。

林田先生 全くだ。この子たちが本物の卵や赤飯を口にできるのは、いつのことだろう。それも、生きていればの話ですがね。

男先生 ちょっと林田先生。聞き捨てなりませんな。そういう思想は教職者として、いや、我が大日本帝国の国民として、ふさわしくないですな。

林田先生 そうでしょうか。僕はただ、子供たちがおなかいっぱい食べられて、伸び伸びと成長できる世の中になってほしい、と願っているだけなのです。

男先生 それがおかしいと言ってるんだ。あんたは、時局に対する認識が足りんのじゃないかね。今は“食べ物が少しでもあったら、自分のことより、前線にいる兵隊さんに送ろう、我々は我慢して、しっかり銃後を守ろう”と、そういう子供を育てるのが教師の務めだろう。それをあんたは…。(FO)

女先生 (小声で)ちょっと、タキ子先生、あなた、林田先生とあまり親しくしないほうがいいわよ。

タキ子 親しくなんて、そんな…。私は、同じ学年担当の先輩として、いろいろご指導いただいているだけです。

女先生 その“ご指導”が問題なのよ、ほら。

男先生 (興奮して)大体、あんたみたいなヤソが、敵性宗教を信じているような人間が、教師をする資格などない。やめてしまえ。

タキ子モノローグ ヤソ？ 林田先生はキリスト信者だったんだ…。

ナレーション 私の尊敬するこの林田先生が、治安維持法違反の容疑で特高警察に連行されたのは、それから数週間後のことでした。

<後編>

校長 えー、皆さん。もうすでにお聞き及びかと思いますが、昨日、当校の林田教諭が当局の取り調べを受けるという、誠に持って残念な事態となりました。今後は決

してこのような不祥事のないよう…。(FO)

- タキ子モノローグ 林田先生が? なぜ? なぜ警察に?
- タキ子 女先生 あ の、林田先生、一体何をしたんでしょうか?
- タキ子 女先生 それ が、はっきりしたことは分からないんですが、どうも問題発言があったらしいんですよ。
- タキ子 女先生 問題発言?
- タキ子 女先生 そう。林田先生の以前の受け持ちの生徒が、今度学徒兵として入隊するに当たり、その出征祝いの席で、先生ははなむけの言葉をとと言われて、「必ず無事で、生きて帰ってこい」と言ったそうなんです。それが“時局に反する”と聞きとがめられたらしい。恐らく、居合わせた近所の者かだれかの密告だったんでしょう。
- タキ子 男先生 A そんな…。「無事帰ってこい」と言うのが、なぜいけないんでしょう。
- 男先生 A 考えてもごらん。世の中、「進め一億、火の玉だ」だよ。教師たるもの、「お国のために命を捨ててこい」と言うべきだったのさ。まあ、林田先生の場合、前々から目を付けられていたんだろうな。一緒に検挙された顔ぶれを見ると、「生活つづり方研究会」の連中ばかりのようだ。
- 男先生 B それにほら、林田さんはキリスト教だから、前から授業の中で「世界の平和」だの「銃を取るよりペンを取れ」だのと教えて、親たちの中には不満に思っていた者もいるらしい。
- ナレーション 今考えると、本当に痛ましい時代でした。1943年(昭和18年)10月に、学生、額との徴兵猶予が全面停止され、2ヶ月後には多くの若者たちが学校を去り、続々と入隊していったのです。
- (効果音) (駅のホームなどの雑踏)
- 男 山本忠雄君の出征を祝し、バンザーイ!
- 人々 バンザーイ! バンザーイ! バンザーイ! ♪“勝ってくるぞと勇ましく〜…”(FO)
- (効果音) (空襲警報サイレン)
- ナレーション それから間もなくして、本土全域に、“空の要塞”^{ようさい}と言われた B29によるすさまじい空襲が加えられるようになり、明くる1945年(昭和20年)の夏、あの広島と長崎の原爆投下を経て、ついに8月15日、日本は敗戦の日を迎えたのでございます。
- (効果音) (セミの鳴き声)(オーバーラップして昭和天皇の終戦の詔勅。すすり泣く人々の声。)
- 男先生 A まさか、信じられない…。
- 男生徒 A どうしたんですか? 先生。
- 女生徒 B 今のラジオは何のお話だったんですか?
- 男生徒 C 先生!
- 男先生 B 戦争が…終わったんだ。

男生徒 A それじゃ、日本が勝ったんですね？

女生徒 B 勝ったんでしょう？

男先生 B いや…。日本は…負けた。

男生徒 C ウソだ！ そんなのウソだ。日本が負けるはずない！

女生徒 B ウソでしょ、先生。

男先生 A 本当に負けたのだよ。今、天皇陛下のお言葉があったんだ。

男生徒 A ウソつき！ 先生のウソつき！ 日本は必ず勝つて言ったじゃないか。

女生徒 B 神風は？ 神風は吹かないの？ 先生。

タキ子 兵隊さんたちは一生懸命戦ってくださったのよ。でも駄目だったの…。

男生徒 A だったら、僕たちが大きくなって、憎い米英をやっつけます。

女生徒 B そうよ。わたしも敵を取ってやる。

男生徒 C 僕も兵隊になって、お国のために死にます！

タキ子 みんな…。もういいのよ。いいの。もうだれも兵隊に行かなくてよかったの…。

先生・生徒 (口々に泣く)

ナレーション そう言いながら、私は突然心の中が、言い知れぬ恐怖感でいっぱいになるのを感じました。わずか2年間の教育が、この純真な子供たちを、見事な「皇国少年少女」に育て上げていたのです。敵を憎み、国のため進んで命を投げ出す「小さな兵士」に育て上げていたのです。私はその時初めて、“教える”ことの恐ろしさに震えました。

その日から、悪夢のような空襲のない生活が始まり、ほっとしたのもつかの間、2学期が始まると、もう一つの戦いが、私たち教師を待っていたのでした。マッカーサー率いる連合軍、私たちは「進駐軍」と言いましたが、その GHQ 本部の指示により、学校教科書の不適切な部分、すなわち神話に基づく歴史、軍国主義をよしとする内容、米英に対する批判の箇所等は、すべて墨で塗りつぶすようにと命じられました。

タキ子 えー、次は4行目から6行目まで塗りましょう。

生徒たち はい。

タキ子 それから、絵も塗りつぶしてください。

男生徒 A 先生、絵も駄目なんですかあ？

タキ子 はい。うっすらとも見えないように、しっかり塗ること。

男先生 A 歴史の教科書を出して。まず1ページの1行目から3行目まで塗りなさい。

男生徒 C 先生、「アメノヌボコでオノコロジマをつくった」というのは間違いなんですか？

男先生 A (セキ払い) まあ、その、なんだ。お前たち、よく考えてみろ。人が雲に乗って空から降りてきたり、そんなドロドロしたもので国ができたりするか？

男生徒 C それじゃ、僕らは今まで、間違っただけを教わっていたんですか？

女生徒 B 先生は、ウソを教えていたんですか?!

タキ子モノローグ 私は一体、教師として何をしてきたんだろう。使命感に燃えて教えてきたことが、皆、真っ黒に塗りつぶさなければならないことだったなんて。だとしたら、あの子たちに謝らなければ…。でも、どうやって？ あの子たちの心に植え付けた傷を、どうやって償える？ それだけじゃない。もし戦争があと数年続いていたら、私の教え子たちも、私の教えを忠実に守って、お国のために命を捨てていたかもしれない…。

ナレーション 私は、自分が教師であること、人にもものを教える人間であったことが、たまらなく恥ずかしく、惨めでした。すでに責任を感じて何人かの教師が学校を去っていました。私は幸いにも紹介して下さる方があり、足が少し不自由であったため徴兵を免れていた農家の次男、大原のもとに嫁ぐことが決まり、間もなく学校を辞めることにいたしました。ちょうどその辞任式の日、入れ替わりのように着任したのが、戦時中投獄されていた林田先生だったのです。

タキ子 林田先生、よくご無事で…。少しおやせになりましたね。

林田 はい。でもこうして帰ってくる事ができて、感謝ですよ。しかし岡野先生はお辞めになるとか。

タキ子 はい。子供たちに何を教えたらよいのか、自信がなくなりました。幸い縁談が決まりましたので。

林田 それは、おめでとうと言わないといけませんね。しかし残念だな。今こそあなたのような、若くて熱心な教師が必要なのに。

タキ子 先生。私はもう人に何かを教えるということが怖いのです。幸い農家に嫁ぎますので、これからは土を相手に、黙々と生きていくつもりです。

林田 そうですか。教えるのが怖い、か。本当は、そういう恐れを持った人が、教師になるべきなんだ。

タキ子 林田先生。先生はこれから生徒に何を教えていこうとなさるんですか？ こんなにもあっけなくすべてが変わってしまった今。

林田 僕ですか。僕はまずかれらに「生きる」ことを教えたいのです。

タキ子 生きること…。

林田 そうです。今までは「お国のために死ぬ」ことが教育のすべてだった。しかしそれは間違ってる。たとえ国家といえども、人の命を奪う権利はないのです。いいえ、それが自分の命であっても、それを勝手に捨てる権利は人間にはない。

タキ子 自分の命でも、ですか？

林田 そうです。命は、神が与えてくださったものです。ですから、人は皆与えられた命を精一杯生きる義務があるんだ。生きることは権利であると同時に義務なんですよ。岡野先生。わたしは獄中で、口では言えないような拷問を受けました。いっそ死んだ方が楽だとも思った。しかしわたしには使命があります。今度こそ、死ぬことではなく、生きることを教える教育を、日本中に広めなければいけない

ナレーション

んです。岡野先生。これからあなたの進もうとしている農業も、命を守り育てる大切な仕事だ。どうか新しい場所で、新しい日本のために頑張ってください。

「生きることを教える教育」。その林田先生の言葉は、50年立った今もはっきり耳に残っております。私は教職は離れましたが、戦争の一体験者として、命の大切さを、子へ、孫へ伝えていきたい。いえ、伝えなければと思っております。それが私のささやかな償いでございます。愛する者を、“国”という名の下に、無益な死に追いやる日が、二度と再び来ないように—。

(完)